

## プログラム・ノート

### ◆シューマン／歌劇「ゲノフェーファ」序曲

ゲノフェーファはシューマンが唯一完成させたオペラ。1847年作曲。1850年作曲者の指揮により初演された。その3年後にシューマンはブラームスの訪問を受け、論文で彼を世に紹介。シューマン43歳、ブラームス20歳の出来事。その約40年後にブラームスは、ツェムリンスキーの曲、クラリネット三重奏曲を出版社に推薦。ブラームス63歳、ツェムリンスキー25歳。時代の繋がり。

ゲノフェーファのあらすじは次の通り。ジークフリート伯爵は、騎士ゴーロに城を守るように頼み、戦に出かける。ゴーロはゲノフェーファに思いを寄せるが拒まれる。ゴーロは家臣を騙してゲノフェーファに不貞の罪を着せ、夫ジークフリートの知るところとなる。ジークフリートはゴーロに妻を処刑するよう命じる。ゴーロは再びゲノフェーファに言い寄るが拒まれる。恐怖で気絶したゲノフェーファのもとに、真相を知ったジークフリートが狩人とともにやってくる。ジークフリートは妻に呼びかけ、2人は再会を喜び合う。

序曲は、不協和音の序奏で始まり、邪悪な雰囲気醸し出す。主部に入ってダンスや、官能の風景が現れる。途中、狩人のテーマが聞こえ、祝福の中、曲は締めくくられる。

(Cl. Hiro)

### ◆ツェムリンスキー／交響曲第2番 変ロ長調

1871年にウィーンで生まれたアレクサンダー・フォン・ツェムリンスキーは、13歳でウィーン楽友協会音楽院に入学する。当時のウィーン音楽界では、ブラームスが4つの交響曲をはじめとする傑作を発表し、ワーグナーは既に数々のオペラを世に送り出していた。また、ブルックナーが一連の交響曲を完成させたのも、この頃である。そういった背景から、ツェムリンスキーがこれらの大作作曲家の影響を受けたのは想像に難くないが、実際に若きツェムリンスキーの作品に目を留め、出版社のジムロックへ紹介したのはブラームスだった（同じくブラームスがジムロックへ紹介した作曲家の中には、やはりツェムリンスキーの若き頃に多くの作品を発表したドヴォルザークがいる）。その翌年、審査員を務めていたブラームスの提案によって「ベートーヴェン作曲賞」から「ウィーン楽友協会作曲賞」へと名前を変えた作曲賞の記念すべき第1回入賞作品に選ばれたのが、ツェムリンスキーの交響曲第2番であった。ブラームスがこの世を去った1897年のことである。

こうしてブラームス派として作曲家のキャリアを開花させたツェムリンスキーであったが、ブラームスと相容れなかったワーグナーや、19世紀終盤に次々と交響詩を発表したリヒャルト・シュトラウスらの影響も受けており、20世紀に入ると交響詩『人魚姫』や抒情交響曲といった、標題音楽や声楽と管弦楽のための作品を発表していく。交響曲第2番は、そのような新しい流れへ移行しつつある時代に、伝統的な交響曲の形式に倣おうとして書かれた作品であった。実際、短い動機を様々な形で発展させたり、1楽章序奏の主題が他の各楽章に登場することで全体に統一感を持たせる構成は、ブラームスやベートーヴェンの交響曲の形式を踏襲しようとしているように見える。一方で、ブラームスの交響曲第4番の4楽章にオマーージュを捧げて書かれた4楽章のパッサカリアは、のちにシェーンベルクの『管弦楽のための変奏曲』や、ウェーベルンの『パッサカリア』に影響を与えたと言われており、20世紀初頭の革新的な音楽への橋渡しの作品と捉えることもできよう。このような複合的な要素から、古典的な構成と抒情的な旋律の中にも、前述の大作作曲家たちの作品には見られないポップさが散りばめられており、そのポップさと伝統的なウィーンの交響曲との融合が、本作の粹な魅力となっている。

#### 第1楽章 Sostenuto - Allegro

冒頭の五度進行と、それに続いてヴィオラとホルンが奏でる序奏の主題。この2つの動機が、全曲通して様々な形で姿を現すことになる。アレグロに入ると、木管楽器の軽快な3連符を背景に、チェロとホルンによる第1主題が続く。この第1主題と、ヴァイオリンのかけ合いによる甘美な香りがする第2主題、そして第2主題に重なる低弦のリズムが代わる代わる姿を見せ、目まぐるしい転調の果てに管楽器が序奏の主題を高らかに鳴らす展開部の高揚感が素晴らしい。

#### 第2楽章 Scherzando - Trio

ドヴォルザークやブルックナーを彷彿とさせるスケルツォ。トリオを含めて、主部で提示される2つの主題のみで構成されているが、そのシンプルさを感じさせない躍動感に溢れている。

#### 第3楽章 Adagio

ドヴォルザークの交響曲第9番2楽章を思わせるコラールに導かれる緩徐楽章。弦楽器の第1主題から展開する主部は、幸福で満たされた夢の中を漂っているような優しさだが、短調へと転じた中間部では一転して、その幸せを脅かすような激しさと物哀しさを見せる。断片的に第1主題が現れると、再び冒頭のコラールから第1主題へと戻り、最後は中間部の主題と9連符が長調に転じて穏やかに奏でられ、静かな夢の中へ消えていくように幕を閉じる。

#### 第4楽章 Moderato

パッサカリア。トゥッティによる短い序奏の後、ヴィオラとチェロのピッツィカートが主題を奏で、この主題を基に30の変奏が展開される。「主題+30の変奏+コーダ」という構成や、どの変奏にも必ず主題が隠されている巧みさがブラームスの交響曲第4番4楽章を彷彿とさせるが、最後はパッサカリアの主題に乗って1楽章序奏のテーマが鳴り響き、唐突なまでに、それまでとは全く異なる輝かしさをもって終わりを迎える。

(Bsn. J. N.)

### ◆ブラームス／交響曲第4番 ホ短調

「ブラームス氏の創作活動が退歩していることは驚きである。彼はこれまでも決して並みの水準を超えて飛躍することができなかったが、それにしても、無内容さ、空虚さ、そして偽善ぶりがホ短調の交響曲を支配し、他の作品にはみられなかったほどに恐ろしいかたちで白日の下に晒されているのである」

———フーゴ・ヴォルフ（第4交響曲を評して）

ブラームス、52歳。1884年から翌年にかけて、オーストリアの避暑地であるミュルツシュラクで二夏を過ごす間に完成されたのがこの第4交響曲である。日頃から自省的であった彼が「甘味があまりないサ克蘭ボ」と呼んだこの曲は、ごく親しい友人の間で

もなかなか理解されなかった。発表の見合わせ、あるいは改訂を促す向きもあったが、指揮者のハンス・フォン・ビューローだけは真価を認め、手兵のマイニンゲン宮廷管弦楽団による初演（1885年10月）を成功に導いた。

### 第1楽章 Allegro non troppo

ソナタ形式。愁いを含んだ主題が、弱拍からの下降音型のため息をつくように始まる。過去3曲の交響曲とは異なり、提示部の繰り返しもない。第2主題はチェロとホルンにより朗々とロ短調で歌われる。ティンパニの用法が極めて限定的であり、トランペットの問い掛けもほとんどスルーされてしまう。結果としてドミナントやトニックの安定感が減じられ、展開部、再現部と進行するにつれて高められた緊張は、コーダにおける力強い結末の礎となる。

### 第2楽章 Andante moderato

冒頭はフリギア旋法による（フリギアとは、古代小アジア・現トルコ域内に栄えた国家を指す）。まずホルン、次いで木管楽器が一對ずつ加わるユニゾンで奏され、最後に残るホ音にクラリネットが嬰ト音を添えることでようやくホ長調が示される。弦のピッツィカートに伴ったクラリネット、ファゴット、ホルンによるあたたかい変奏が収まると、金管楽器によるホ音のオクターブに包まれたヴァイオリンが情熱的に現れる。

### 第3楽章 Allegro giocoso

2拍子ではあるものの、アクセントを伴う奔放なリズムや、弱拍と強拍が裏返しになったりするめまぐるしさは、スケルツォと云ってよい。冒頭の動機の5小節目に現れる sff の長音により、次に爆発するエネルギーが溜め込まれる。展開部では高音の合いの手の長音符が組み入れられ、コーダではこの掛け合いが第4楽章のパッサカリア主題を準備する。ピッコロ、コントラファゴットとともにこの楽章で編成に加わるトライアングルの響きが印象的だが、ブラームスの交響曲としては初めて、ティンパニに3つの音（G/C/F）が配されていることも興味深い。

### 第4楽章 Allegro energico e passionato

バッハのカンタータ150番の第7曲（Meine Tage in dem Leide）から取られた主題によるパッサカリア（シャコンヌ）形式の変奏曲であるが、一方で提示部－展開部－再現部を備えたソナタ形式とみなすこともできる。

和声は最初、サブドミナント（イ調）を軸に動いていくが、第4変奏で主音のホ短調が打ち出され、明瞭な旋律がヴァイオリンで歌われるとともに低音にパッサカリア主題が現れる。フルートソロによる憂いを含んだ旋律が長調に転じると、クラリネットとオーボエが応じる。トロンボーン、ホルン、ファゴットによるコラール風の旋律は、バロック時代の舞曲であるサラバンドのリズムで奏される。これを繰り返す管楽合奏の慈愛に満ちた響きは、無情にも強奏にかき消されてしまい、展開部となる。息つく間もなく厳しい変奏が続き、ついには第1楽章の主題に通じる三度下降と、パッサカリア主題とが融合し、コーダに至る。上昇する主題が断ち切れ、せめぎ合いが繰り返されると、最後にはドッペルドミナントによってホ短調に解決され、なだれ込むように曲を閉じる。

十二音技法の提唱者であり、その結果として調性音楽を解体するに至ったシェーンベルクは、ブラームスの音楽に強く惹かれ、ピアノ四重奏曲ト短調を大管弦楽に編曲するなどしているが、その彼がブラームスから学んだこととして、論文「国民音楽」の中で次のようにまとめている。

- 「モーツァルトを通じて無意識のうちに入り込んできた多くのもの。とりわけ不規則な拍節法、およびフレーズの拡大と縮小」
- 「表現の造形性。明瞭性を確保するために大きなスペースが必要な際に、いかなる構造も細部まで仕上げること」
- 「楽曲構造の体系化」
- 「節約、それでいて豊かであること」

ブラームスはこれらのいわゆる作曲技法的「職人芸」を推し進めた結果、音楽を単位要素まで分解し、かつ組織的に組み立てることで作品を作り上げていった。この第4交響曲は、功なり名遂げた大家が、自らを含む過去の音楽から得た果実を惜しみなく盛り込んだ意欲作であるだけでなく、その執拗なまでの労作をほとんど感じさせない素朴な音楽的魅力をも併せ持っている。西洋音楽における古典とその革新とが高次に融合されたさまは、老ブラームスの野心そのものと言ってもよいだろう。

(Trp. I. T.)